

③ 南四国出土土偶の系譜

はじめに

縄文・弥生移行期の重要遺跡である居徳遺跡の調査・研究に取り組んでいる。居徳遺跡にまつわる重要課題には東日本系土器、大型土偶、木胎彩色漆器、木製鋤、受傷人骨がある。これまでに関連資料の提示(宮里 2017)、東日本系資料の素描(宮里 2018)を行い、2019 年度からは発掘調査を開始した。研究の過程で地域の時間軸を整備する必要を感じ、深鉢と磨研鉢について分類と編年を再検討した(宮里 2022a・b)。結果、縄文晩期系統の土器が9つの段階に分かれ、その型式組列は遠賀川式土器と共存しながら弥生前期後半までつづくことを明らかにした。南四国の縄文・弥生移行期研究において、遠賀川式土器や他地域との関係を考えるための枠組みが整理されたことは大きな成果であり、本稿はこの成果に基づき上の土偶の問題に取り組むものである。以下、対象とする土偶を南四国出土資料とし、居徳遺跡や田村遺跡の出土資料について系譜や背景を検討する。

1 南四国出土土偶の諸例

南四国出土土偶は8点が知られる。土佐市居徳遺跡に3点、南国市田村遺跡に4点があり、旧十和村広瀬遺跡にも1点がある。年代は広瀬遺跡が縄文時代後期、居徳遺跡が縄文時代晩期～弥生時代前期、田村遺跡が弥生時代前期～後期となる。居徳遺跡、田村遺跡を中心に資料の特徴を確認する。

(1) 居徳遺跡出土資料

居徳遺跡からは4D47土偶、3A583土偶、3A589土偶の3点が出土した⁽¹⁾。

4D47土偶(第Ⅳ③-1図1)は大きな顔に特徴があり顔の下端は肩・腕によって縁取られる。胴は大部分が失われ残高18.2cm、残幅17.5cmとなる。仮に短脚であっても全長は20cmを超え土偶としては大型の部類となる。全体に立体的で厚みがあり、破損部分に厚さ4～6mmの器壁が認められるなど大型土偶に通有の中空構造であったと考えられるが、内部に充填された焼成不良の粘土が流出した可能性もある(曾我他 2002)。頭部は山形に近い円盤状の基体の前後が膨張したような形状で、顔面の中央には長く筋の通った鼻が隆起し、鼻根付近の両側にはつり上がった長三角形の目が陰刻される。眉毛の表現はない。耳に当たる位置にはナデによる縦長の窪みがある。後頭部の中央には3cm大の円丘状に隆起した部分があり結髪由来の表現とみられる。両耳の直下には肩に相当する大きな隆起があり、側方に張り出した先端は面取りされ平坦となる。両肩から胸部中央に向かって下降しつつ延びる隆起した腕は先細りの形状で、破損により確認できないが先端はほぼ接していたと考えられる。腕の造形は、結髪土偶における肩と乳房を連結した隆起帯が転化したものと考えられる。外面は橙色、内面は灰褐色で焼成はやや不良である。胎土には5～10mm大のチャートを含み在地産とみられる。4D47土偶は居徳遺跡4D区の窪地に堆積した黒色泥炭質土層から出土した。層中の土器は縄文後期～弥生前期にわたり時期の絞り込みは困難であるが、遺跡における東日本系土器の帰属時期を参照すると刻凸長頸型深鉢・磨研鉢8段階(第Ⅳ③-7図)に相当すると考えられる。

3A583土偶(第Ⅳ③-1図2)は土偶の頭部片で残高3.2cm、幅3.7cm、厚さ1.6cmの小型品である。頭部の形状は山形で、目尻の下がった楕円形の目が陰刻される。眉・鼻の表現は認められない。後頭部の中央は粘土塊の貼付により隆起する。山形の頭部形状や後頭部の隆起に4D47土偶との共通点がある。色調は橙色で、胎土には長石・石英・角閃石を含み搬入品の可能性がある。出土層位は3A589土偶と同様である。

3A589 土偶(第Ⅳ③-1 図3)は台式土偶(長原タイプ)の胴部片である。四周を欠失し残高 4.8 cm、残幅 6.4 cm、厚さ 1.4 cm となる。上端付近には円丘形の乳房一對(1 cm 大、左側を欠失)が 2 cm の間をおいて貼付される。乳房の裾には接合に伴うナデ凹帯が環状にめぐる。胴部中央には隆線による 5 本の正中線が施文される。器面全体はナデ仕上げであるが隆線上面にはミガキがかかる。5 本の隆線のうち側方の各 2 本は上端が外方に曲がっており、隆線帯は全体として上開きの撥形となる。脇腹相当の位置には横方向のヘラ描き短線文が 2 本ずつ施文される。沈線内端と乳房の縦位置関係は左右均等である。左脇腹沈線の内端下位にあたる下縁には穿孔の痕跡が認められる。対となる逆側縁辺にも穿孔の痕跡が微かに残る。左右の脇腹沈線および穿孔上端は高さが不揃いで左脇側がやや高い。胴部は腹を凹ませるように上下左右が内反りとなり、台式土偶一般とは反りの向きが逆となる。胴部は、左半身の側縁が直線的に擦り落とされ本来の形状を窺い難いが、撥形の隆線帯や右脇腹付近の遺存状況によれば、肩に向かって上開きとなる形状であったと推測される。背面は凹凸がのこる粗いナデ仕上げで前面に比べてつくりが雑である。色調は褐灰色で正中線と左乳房が煤けて黒ずむ。胎土には白・灰色のチャート粒を含み在地産と考えられる。3A589 土偶は居徳遺跡 3A 区の斜面部分に堆積する縄文晩期～弥生前期の包含層から出土した。伴出遺物による時期の絞り込みは困難であるが、長原タイプ土偶との比較から、刻凸長頸型深鉢・磨研鉢 8 段階のうちのより新しい時期と考えられる。

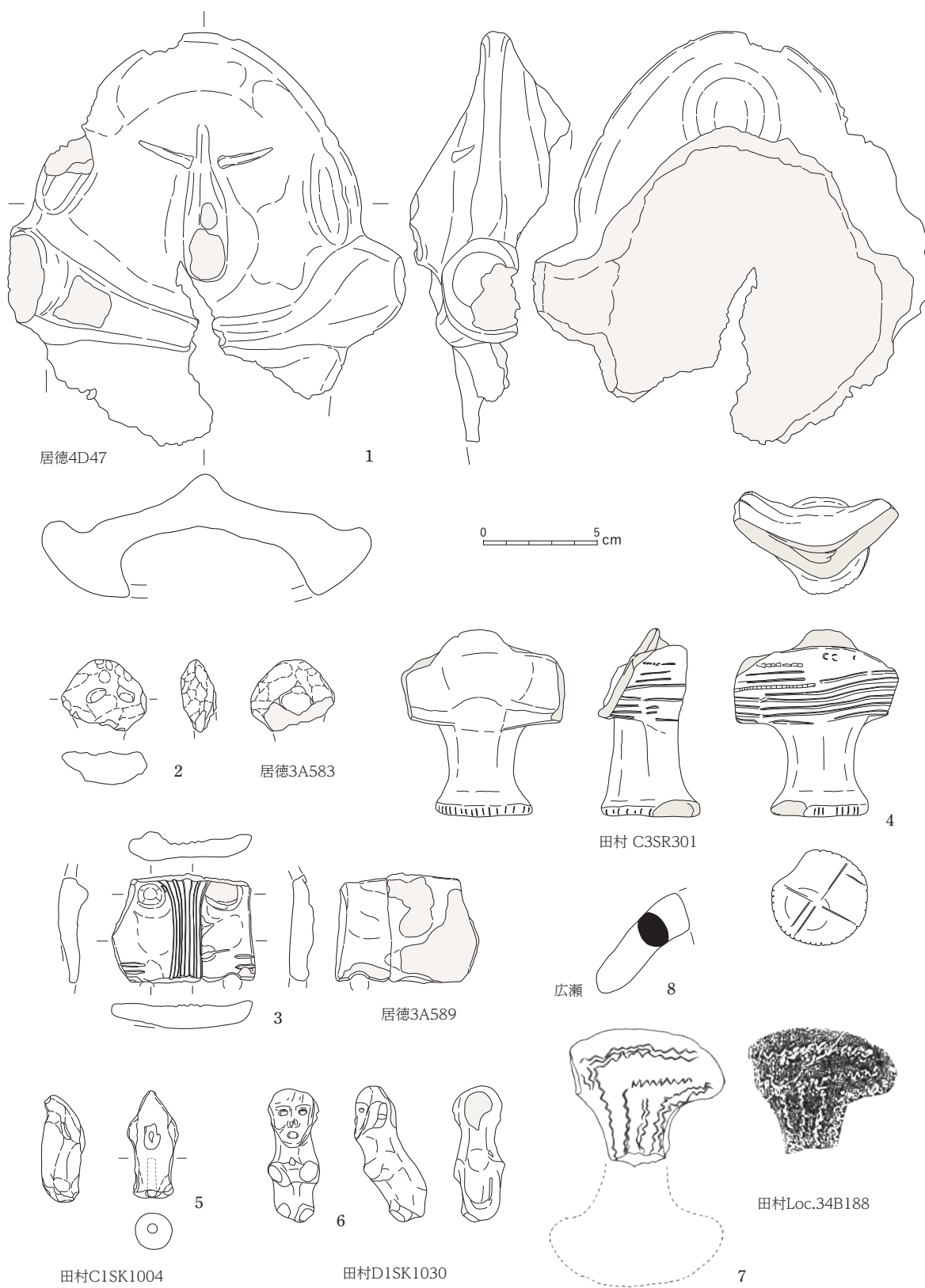
(2) 田村遺跡出土資料

田村遺跡からは C3SR301 土偶、C1SK1004 土偶、人面付土製品(D1SK1030)、分銅形土製品(Loc.34B188)が出土した⁽²⁾。前 2 者について詳述する。

C3SR301 土偶(第Ⅳ③-1 図4)は筒状の脚部に横長の板状部が載った奴舩形系列に類する土偶である。上部を欠失し残高 8.2 cm、幅 7.3 cm となる。板状部は広げた両腕を後ろにひき胸を張ったような形状で、文様のある正面側にやや前傾する。板状部正面には横方向の櫛描文が施文される。櫛描文は先端がやや丸い 6 歯ないし 4 歯のクシ状工具を右から左に動かし施文された。大部分は 6 歯で施文され、右肩一帯の上半部に 4 歯櫛描文が加えられる。右上半部の 4 歯櫛描文は蹴り彫りのように細かな刻みが接続する線刻となっている。上部中央には半裁竹管文のような C 字文が横に 2 つ並ぶ。板状部の背面には下縁に沿って幅 5～7 mm、厚さ 3 mm 程度の顎状隆帯が加えられる。裾広がりの筒状脚部は断面円形で筒部径が 2.9 cm、裾径が 4.3 cm である。裾は正面側がやや張り出す。裾の外周には縦方向の細かい刻みが連なる。外底面にはヘラ描き沈線が十字形(一部複線)に施文される。色調は黄褐色～灰黄褐色で相対的に前面が白く背面が赤い。胎土にはチャート粒を含み在地産と考えられる。C3SR301 は集落の北東を区切る大溝で、覆土には弥生前期から後期までの土器を含み時期を絞るのが困難であるが、土偶面に施文されたやや粗い櫛描文は弥生中期前葉(土佐Ⅱ様式、出原 2000)の土器と類似し時期比定の参考となる。

C1SK1004 土偶(第Ⅳ③-1 図5)は高さ 4.8 cm の小型粗製品である。側面の隆起を耳とするか腕とするかで評価が変わるが、ここでは正面の隆起を鼻、側面の隆起を耳と考える。すると土偶の大部分は頭部で頭像状の形態となる。眉・目・口の表現はない。頭頂部から斜め後方に突出する部分は鶏冠状隆起の表現とみられ、本土偶を後頭部結髪土偶(東奈良タイプ)の類例とする根拠となる。底面中央には消化器にあたる棒状の穿孔がある。色調は橙色で、胎土には砂粒を含み在地産と考えられる。C1SK1004 は 160 cm 大の大型土坑で西見当 2 式の甕がまとまって出土している。弥生前期後半で居徳型深鉢・磨研鉢 9 段階に併行する。

その他の分銅形土製品(第Ⅳ③-1 図7)や人面付土製品(第Ⅳ③-1 図6)は本稿の問題設定から外れるため検討対象から除外する。



第IV③-1図 南四国出土土偶

2 南四国出土土偶の系譜

各事例について特徴を比較検討した結果、居徳 4D47 土偶は結髪土偶、田村 C3SR301 土偶は奴舩形系列、居徳 3A589 土偶は台式土偶(長原タイプ)、田村 C1SK1004 土偶は後頭部結髪土偶(東奈良タイプ)との関係が指摘できる。結髪土偶、奴舩形系列、台式土偶、後頭部結髪土偶について概要を述べ南四国出土土偶と比較する。

(1) 結髪土偶との関係

結髪土偶⁽³⁾は会田容弘(1979)が、亀ヶ岡文化の土偶が大きく変化する大洞 A' 式前後の資料群として位置づけた、結髪形土偶・刺突文土偶・終末期土偶のうちのひとつである。結髪土偶は 13 の特徴⁽⁴⁾により明確に定義され刺突文土偶と区分された。佐藤嘉広(1996)は東北地方の弥生土偶を検討するなかで、結髪形土偶を背面垂下文・背面横位文様帯・胸部隆帯の分類・組合せにより 4 分類し、結髪形土偶 1~4 期を設定した。分類属性のうち胸部の隆帯は変化の方向・階梯が明瞭で相対年代の手掛かりとされた。金子昭彦(2004・15)は佐藤の成果をもとに、結髪土偶・刺突文土偶について型式学的検討⁽⁵⁾を加えながら土器編年との対照をはかった。結果、各部位に生じる大きな変化は洞 A₂ 式から大洞 A' 式にかけて起こると整理された。

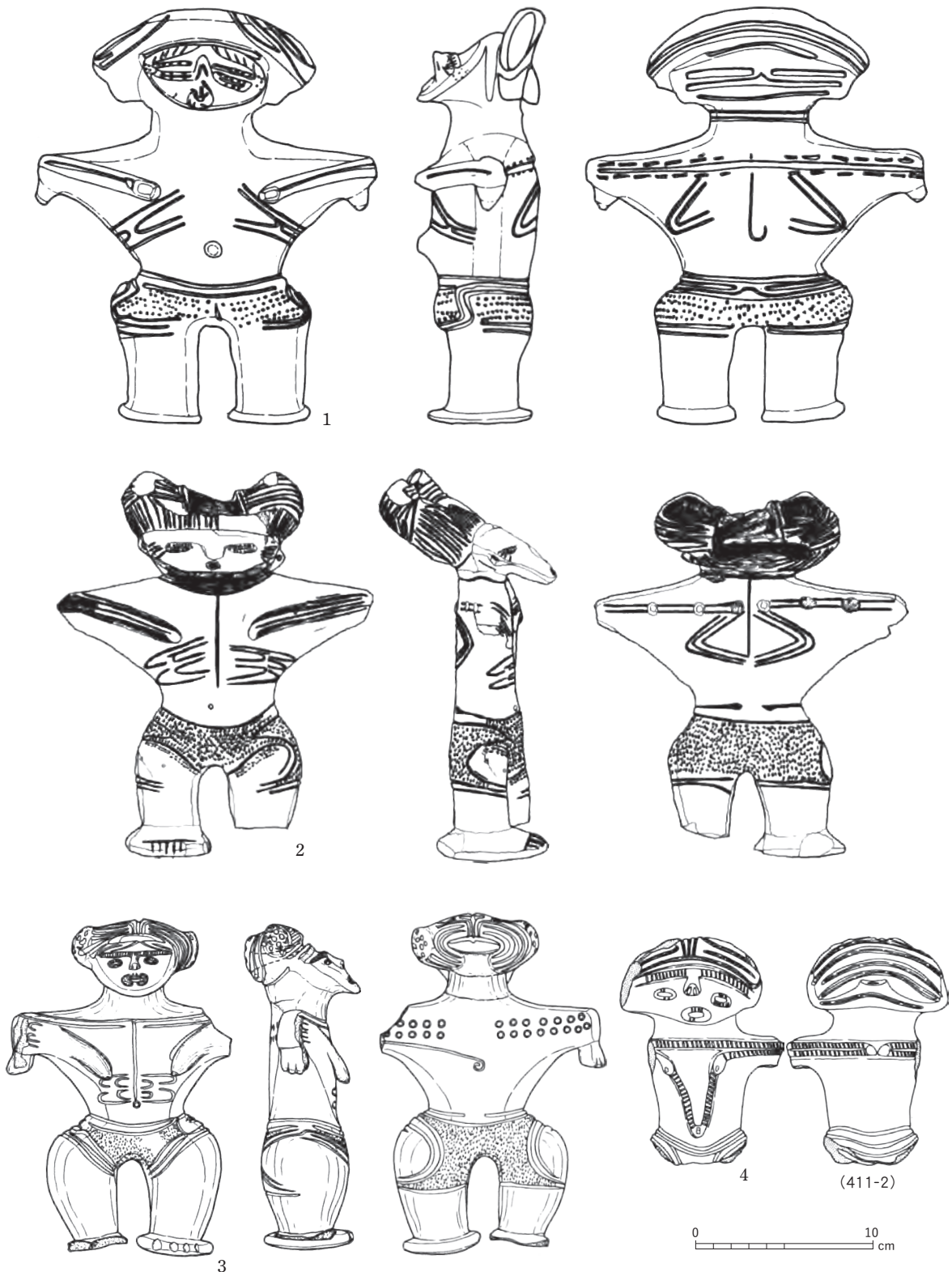
結髪土偶の胸の隆帯は肩と乳房を連結する装飾である。起源は不詳であるが、大洞 A₁ 式期の九年橋 411-2 土偶(第Ⅳ③-2 図 4)のような乳房や臍を連結する文様が転化したものと考えられる。佐藤(1996)の分類によれば隆帯の先端(乳房)が隆起するものに始まり、A: 隆帯に刻みがあるもの、B: 隆帯に刻みがないもの(沈線あり)、C: 隆帯が付け根に向かって細まり収束するもの、D: 添付粘土(乳房)から肩方向に僅かな隆帯が延びるもの、E: 粘土粒(乳房)が添付されるもの、と順に変化する。

居徳 4D47 土偶の「腕」は、結髪土偶の本来の腕が小突起として痕跡化したこともあって、胸の隆帯が腕と認識され転化したものと考えられる。居徳 4D47 土偶の腕は乳房にあたる隆起を伴わず胸の前で腕の先端をあわせる形状となる。居徳 4D47 土偶では肩と腕の連結が明瞭であるため、起源となりうるのは佐藤の B 段階であり、金子(2004)によれば大洞 A₂ 式期にあたる。しかし結髪土偶と居徳 4D47 土偶の類似度は全体として低く、一部要素を大きく変容させつつ取り入れた格好となる。居徳 4D47 土偶における、結髪土偶に認められない肩の強調は、東北地方に併存した刺突文土偶⁽⁶⁾の肩パッドに影響されたとも考えられる。

居徳 4D47 土偶の頭部は円盤形基体の前後が張り出す形状に特徴がある。鈴木正博(2004)は顔面の傾斜に注目して居徳 4D47 土偶を「斜顔結髪土偶」と分類し、類例に乾 836 土偶(第Ⅳ③-3 図 2)をあげた。乾 836 土偶は円盤状基体や後頭部の隆起に居徳 4D47 土偶との類似をみせるが、小型であることや、沈線・列点を加えた顎の表現、後頭部のレンズ状重弧文など差異点が少なくない。乾 837 土偶(第Ⅳ③-3 図 3)は省略形土偶であるが、頭部と体部のバランスは居徳 4D47 土偶の全体像を考える参考となる。顔を大きく作る事例に地方土偶(第Ⅳ③-3 図 1)がある。屈折像土偶の一種であるが、全体の半分をしめる頭部は、平板な顔面に上部が弧をなす結髪表現が加わる形状で結髪土偶に類似する。結髪土偶の頭部は上端が弧をなすものから両端が反り上がるものに変化するが(金子 2004)、弧をなす結髪は円盤状で背面に重弧文をもつ例が顕著であり(第Ⅳ③-2 図 1・4、第Ⅳ③-3 図 4)、乾 836 土偶は大洞 A₂ 式期の結髪土偶が変容したものと評価できる。顔面を過度に強調する稀少例とあわせて、居徳 4D47 土偶を構成する要素は東北から北陸にかけての各地域で個別に散見される状況である。

(2) 奴舩形系列との関係

奴舩形土偶は、当初は結髪形・刺突文土偶以外の終末期土偶として一括されたが(会田 1979)、砂沢遺跡の報告(弘前市教育委員会 1991)にいたって全体が奴舩に似る「奴舩形土偶」と分類された⁽⁷⁾。佐藤



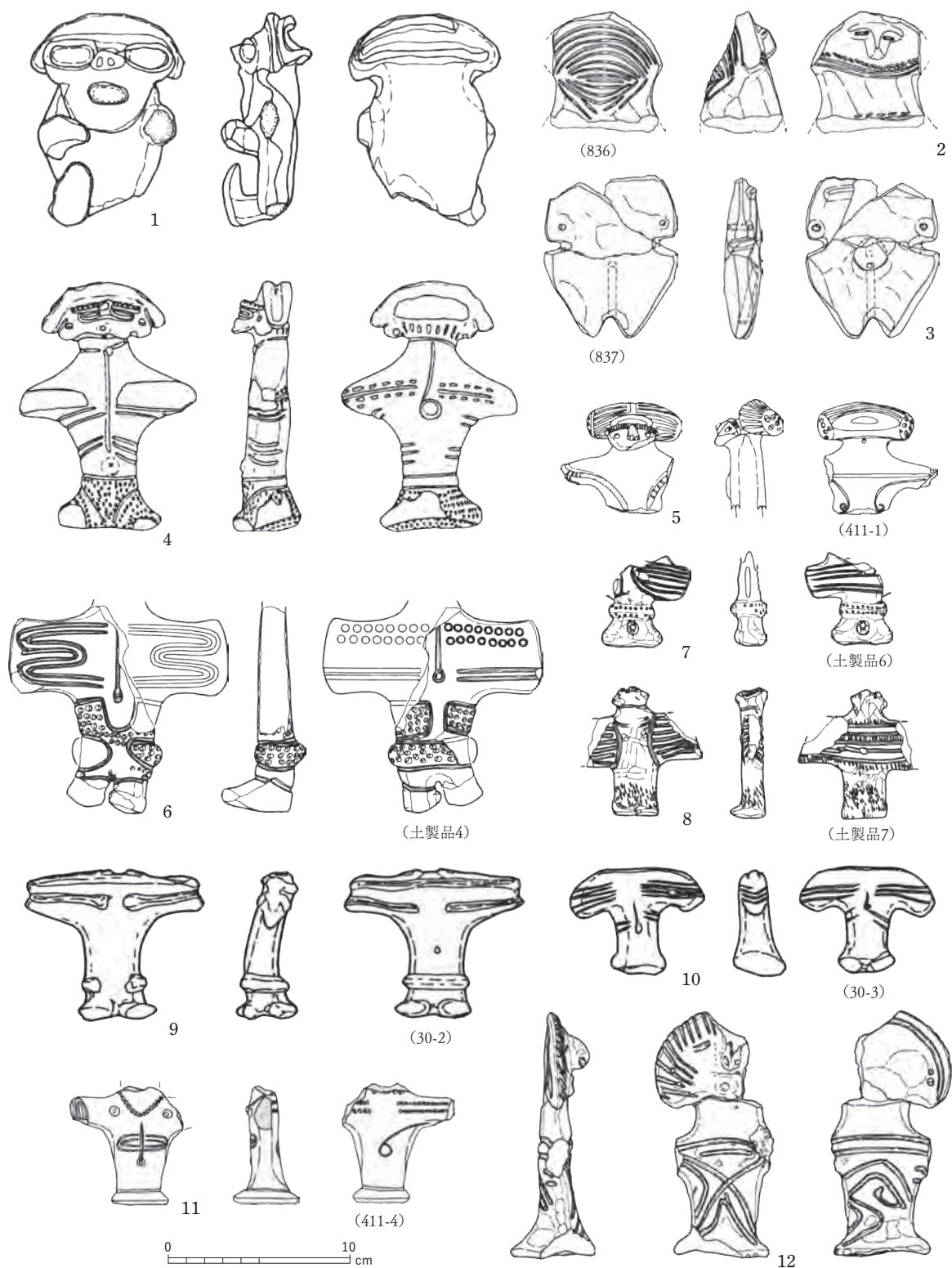
第IV③-2図 結髪土偶

(1. 山形県釜淵C、2. 秋田県鑑田、3. 岩手県宮沢、4. 岩手県九年橋)

(1996)は会田が終末期土偶としたものをa類～f類に細分したが⁽⁸⁾、このうちc類が奴舩形土偶で、2本の粘土紐を合わせて胴部をつくり扁平な腕が横にひろがるものと定義した。頭部に省略傾向があること、結髪形・刺突文土偶の双方から系譜をひくことがあわせて指摘された。金子(2015)は上半部が板状に造形される土偶を、結髪土偶、刺突文土偶のそれぞれから派生する諸系統に区分し、結髪土偶の系統には奴舩系列、T字形系列、台式土偶、台式・屈折像系列を設け、刺突文土偶の系統には刺

突文・奴舩系列を設定した。金子の分類は細分と系統の整理を目指すものとして有意義であるが、本稿ではより大きな範疇での比較が適当であるため、上半部の板状化と脚部の台状化が生じた1群を奴舩形系列として一括する。

奴舩形系列への指向は結髪土偶のうちにみられる。九年橋411-1土偶(第Ⅳ③-3図5)では胸の隆帯を維持するが上半身に板状化傾向がみられる。砂沢4土偶(第Ⅳ③-3図6)は上半部が板状となるが結

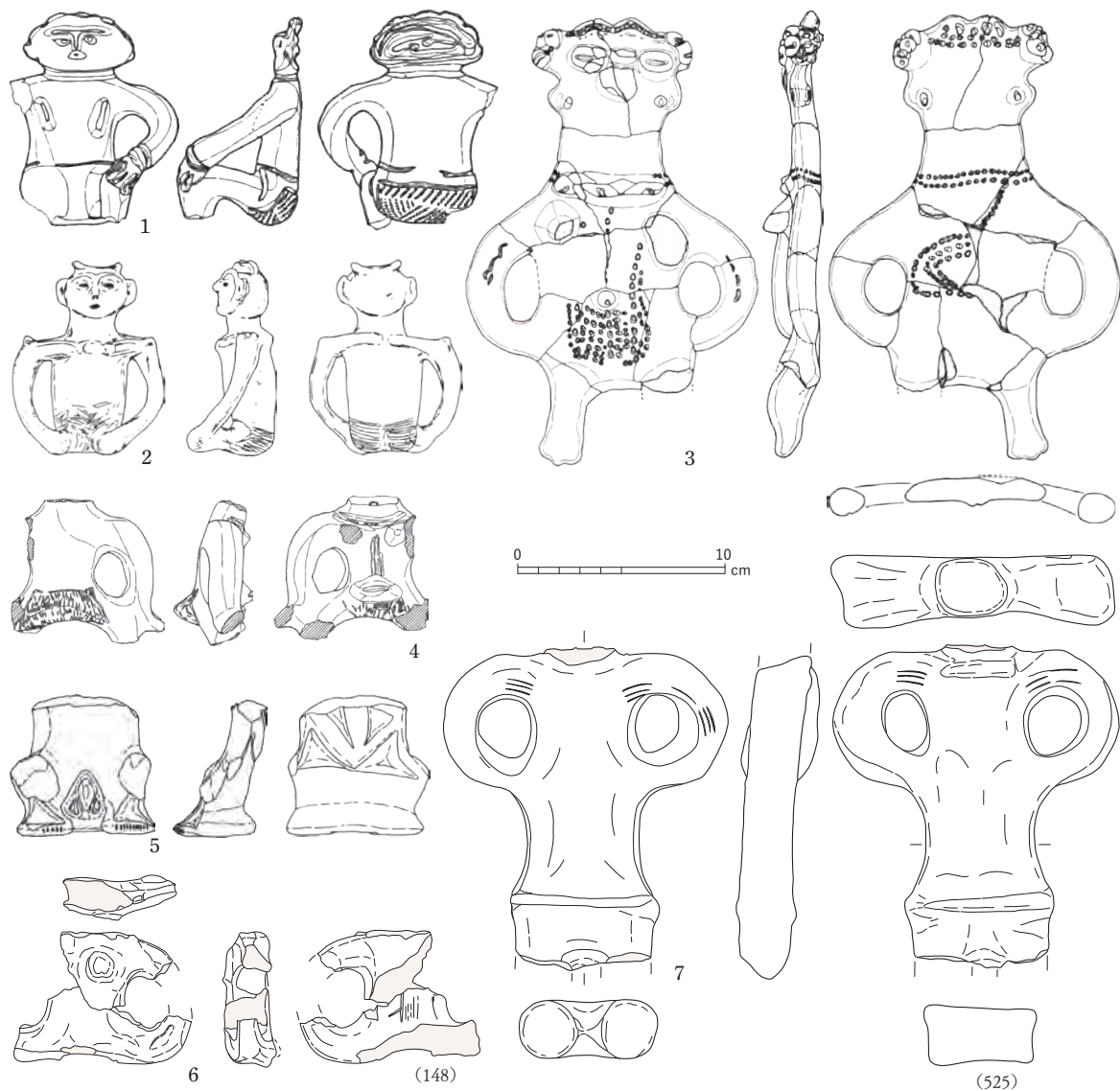


第Ⅳ③-3図 奴舩形系列関連資料

(1. 秋田県地方、2・3. 石川県乾、4. 岩手県芦渡、5・11. 岩手県九年橋、6~8. 青森県砂沢、9・10. 岩手県谷起島、12. 群馬県沖Ⅱ)

髪土偶に通有の文様をもち、脚は顕著に短くなるが辛うじて脚の形状をとどめる。腰回りには新たな要素として隆帯がめぐる。芦渡土偶(第Ⅳ③-3図4)は全体として結髪土偶の形態をとるが、体部は板状で、脚は痕跡的となり台状に近づく。九年橋411-4土偶(第Ⅳ③-3図11)は板状化傾向の上半部に結髪土偶に通有の文様をもつが脚は完全に台状となる。芦渡土偶は大洞A₂式期、九年橋411-4土偶は大洞A'式古期、砂沢4土偶は大洞A'式古期とされ(金子 2014)、奴舩形系列は大洞A₂式から大洞A'式にかけて顕在化すると分かる。弥生前期末を前後する頃には、脚部の痕跡化、小型化、文様の簡略化(第Ⅳ③-3図7~10)が連動して進行するという(金子 2014)。

田村C3SR301土偶は上半部の反りが大きく下半が筒状であるなど、奴舩形系列との形態差は大きい。説明に窮するが、現状では脚部の円柱化については北関東・中部高地における黥面中実台式土偶(第Ⅳ③-3図12)から土偶形容器にいたる変化過程(設楽 2017)のなかで理解しておく。横板状部分の反りは台式土偶にみられる肩を後に引く形状と関わり、関連する資料に愛知県東光寺土偶(第Ⅳ③-4図7)がある。東光寺土偶は環状腕により台式土偶と関連づけて理解されるが全体的には奴舩形系列との類似度が高い。断面台形の胴部と別づくりの円柱状の脚は、脚間に陰部表現をもつが、砂沢4土偶(第Ⅳ③-3図6)のような短脚と推測され、腰をめぐる隆帯とあわせてみると全形は谷起島30-2土



第Ⅳ③-4図 屈折像土偶ほか

(1. 宮城県願行寺、2. 青森県二枚橋、3. 青森県今津、4. 岩手県河崎の柵、5. 滋賀県赤野井浜、6. 愛知県伊川津、7. 愛知県東光寺)

偶(第Ⅳ③-3図9)に近い。東光寺土偶の環状腕は背面が側方に向かって厚みを増す形状であり広げた両腕を後に引いたような造形となる。台式土偶に通有の造形が、台式土偶と奴舩形系列の要素を併せ持つ東光寺土偶に取り込まれたのであり、中間の資料を欠くが、その延長線上に田村C3SR301土偶を位置づけることができる。櫛描文については東北の弥生前期末を前後する奴舩形土偶(第3図7～10)にみられる文様の単純平行線化に関わるとも考えられるが、いずれの問題も時間・空間の懸隔を埋めがたく、さらなる資料・説明を必要とする。

(3) 台式土偶との関係

台式土偶は当初不明土製品とされていたが、近畿地方の土偶を網羅的に検討した片岡肇(1983)によってまず土偶としての位置づけが与えられた。田中清美(1992)の復元をもとに、鈴木正博(1993)は関連資料を「中実台式土器」として検討し、両腕系列→双孔系列→続長原系列となる変遷観を示した。鈴木はさらに青森県今津土偶(第Ⅳ③-4図3)を候補とする起源論にも言及し、台式土偶に関わる主要な論点を提示した。1997年の「土偶とその情報」研究会の成果をもとに大野薫(1999)は台式土偶(長原タイプ)の各資料を詳細に検討しながら4つの段階を設定した。大野による、胴と腕が別づくり(第Ⅰ段階)、板状の胴に双孔を穿つ(第Ⅱ段階)、小型化し台部が縮小(第Ⅲ段階)、台部がほぼ消失(第Ⅳ段階)という4段階は台式土偶の変遷を的確に捉えている⁽⁹⁾。大野(2000)はさらに近畿の終末期土偶を人形土偶・台式土偶・後頭部結髪土偶と整理するなかで、台式土偶については側縁に挟りをもつ鬼塚タイプ(第Ⅳ③-5図11・12)を独立させ、長原タイプと併存させた。秋山浩三(2002)は大野の集成・分類をもとに近畿終末期土偶について共伴遺物による時期の絞り込みをおこなった。包含層資料が多い土偶に対し大別4期細別6期⁽¹⁰⁾を設定し検討した結果、台式土偶の登場は船橋式以後で、とくに長原式を主体とする時期に集中することが確認された。大野の分類に対照すると宮ノ下土偶⁽⁹⁾(第Ⅳ③-5図1)や鬼塚土偶(第Ⅳ③-5図12)が相対的に古く(船橋式～長原式)、雲井土偶(第Ⅳ③-5図9)や長原Ⅲ215土偶(第Ⅳ③-5図10)が新しいなど(長原式主体で遠賀川系を伴う)、想定された変遷に一定程度対応している。田井中土偶(第Ⅳ③-5図7)のように遠賀川系主体(長原式を伴う)の時期となるものもあるが、台式土偶はおおよそ長原式前後に収まることが検証された。また、台式土偶の終焉に関わる問題として分銅形土製品との関係がある。台式土偶関連資料を分銅形土製品の起源とする考えは丁・柳ヶ瀬土偶(第Ⅳ③-5図13)をもって石川日出志(1987)により示唆されていたが、小林青樹は岡山県真壁遺跡の資料を基点として台式土偶から分銅形土製品への連続性を検討した。類似点の網羅的な指摘のもとに(小林2002)、台式土偶の最後段階とした雲井土偶(第Ⅳ③-5図9)から真壁土偶、阿方土偶(第Ⅳ③-6図14)、龍川五条土偶(第Ⅳ③-5図15)を経て弥生中期中葉の分銅形土製品へと連なる過程を示した(小林2007)。他方、長原タイプ土偶の起源については、東北地方を示唆した鈴木正博(1993)以後積極的な議論はなかったが、近年は寺前直人(2015・17)が屈折像土偶との関係について検討を進めている。寺前は西日本における屈折像土偶の事例を検討するなかで、滋賀県赤野井浜土偶(第Ⅳ③-4図5)を東北地方の屈折像土偶と長原タイプ土偶をつなぐ資料と位置づけ、願行寺土偶(第Ⅳ③-4図1)、二枚橋土偶(第Ⅳ③-4図2)、河崎の柵疑定地土偶(第Ⅳ③-4図4)から赤野井浜土偶を経て宮ノ下土偶(第Ⅳ③-5図1)へいたる変化階梯を示した。西日本と東北の土偶に密接な関わりがあることを示す重要な見解であったが、金子昭彦(2019)が批判したように資料の帰属時期に対する注意が十分でなく再検討が必要となっている。成立過程は保留となるが、台式土偶は近畿地方で長原式を前後する期間に出現・展開し、分銅形銅製品との関係までが射程に入る資料となっている。

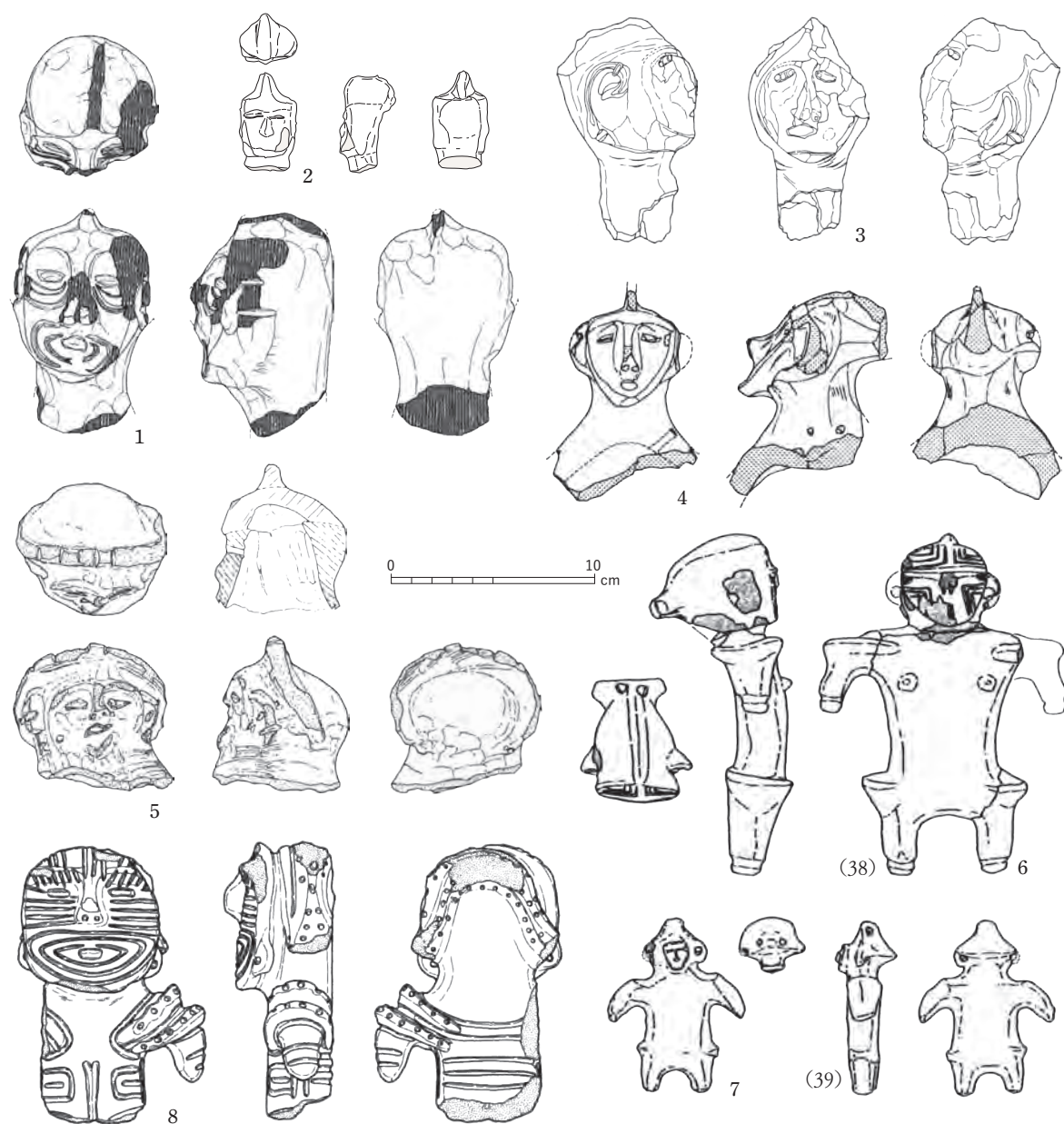
居徳3A589土偶は長原タイプ土偶の最末期に位置づけられる。居徳3A589土偶の乳房と双孔の位置関係をみると比較対象となるのは大野(1999・2000)の第Ⅳ段階にあたる長原Ⅲ215土偶(第Ⅳ③-5図10)である。長原Ⅲ215土偶は、西ノ辻土偶(第Ⅳ③-5図2)から田井中土偶(第Ⅳ③-5図7)へと胴・乳



第IV③-5図 台式土偶・分銅形土製品関連資料

(1. 大阪府宮ノ下、2. 大阪府西ノ辻、3・4・5・8・10. 大阪府長原、6・11. 愛知県麻生田大橋、7. 大阪府田井中、9. 兵庫県雲井、12. 鬼塚、13. 兵庫県丁・柳ヶ瀬、14. 愛媛県阿方、15. 香川県龍川五条)

房・脇・腕の位置関係が失われていく変化の延長線上に位置づけられる資料で、双孔も小型・円形に変化している。第Ⅳ段階の長原Ⅲ 215 土偶や雲井土偶(第Ⅳ③-5図9)は第Ⅲ段階の麻生田大橋10土偶(第Ⅳ③-5図6)や田井中土偶に比べて縦長で上開きの傾向があるが、居徳3A589土偶にみられる、乳房から双孔までの距離が長く、上開きの撥形と推定される形状は第Ⅳ段階に生じた変化の延長線上に位置づけられ、分銅形土製品の祖型(第Ⅳ③-5図14・15)により接近する。居徳3A589土偶にみられる脇腹の文様は結髪土偶との関連が想定される。結髪土偶の脇腹文様が2~3条の平行線となるのは大洞A'式期からの特徴である(金子 2004)。正中線の隆線表現は居徳遺跡出土の東日本系土器にみられる特徴でもあり影響関係が認められる(宮里 2017・18)。正中線が5本となるのは稀有な特徴であるが加飾化の傾向は雲井土偶にも認められる。雲井土偶は肩と腰にあたる位置に楕円形の囲み内を短線で充填する文様をもつ。同箇所への囲み充填文様の事例には刺突文土偶があり、肩パッドが顕著となる大洞A'式以降の刺突文土偶と類似する(金子 2004)。居徳3A589土偶は長原タイプ土偶の系譜上にあって、結髪土偶の相対的に新しい特徴を取り込んだものと評価できる。



第Ⅳ③-6図 後頭部結髪土偶ほか

(1. 香川県鴨部川田、2. 兵庫県長田神社境内、3. 大阪府東奈良、4. 島根県西川津、5. 大阪府目垣、6・7. 愛知県麻生田大橋、8. 長野県)

(4) 後頭部結髪土偶・黥面土偶との関係

後頭部結髪土偶は大野(2000)が近畿の終末期土偶のひとつとして分類した1群であり、頭頂部から後頭部にかけての鶏冠状もしくは髻状の隆帯に特徴がある。秋山(2002)によれば滋賀里Ⅳ式～船橋式期の長田神社境内土偶(第Ⅳ③-6図2)から弥生前期後半の東奈良土偶(第Ⅳ③-6図3)までの時期に確認される。中部・東海地方との関連が指摘されるが、鶏冠状の結髪は黥面との結びつきが強く黥面土偶の問題にも繋がっていく。後頭部結髪(形)土偶は元来、前田清彦(1988)が有髻(黥面)土偶のうちの1群を仮称した用語であり、立体的に張り出した後頭部の先端を結った造形の土偶(第Ⅳ③-6図6)を対象とした。前田(2000)は後頭部の表現が微弱な近畿の資料を後頭部結髪土偶の1類型として東奈良タイプと分類した。近畿との比較が中心となる本稿では大野の用語にしたがって近畿の東奈良タイプを後頭部結髪土偶と呼称するが、東奈良タイプは典型とされる古沢町タイプに先行して出現し、むしろ頭頂部の鶏冠状隆起は東奈良タイプから古沢町タイプへの移植である可能性が指摘される(前田2000)。設楽博己(1999・2021)は弥生前期の島根県西川津土偶(第Ⅳ③-6図4)が非黥面であることに注目して鶏冠状隆起の起源を農耕儀礼に関わる鳥装に求めたが、当否は判断しがたい。設楽(2021)が「鳥が飛ぶ空を意識した」とする西川津土偶の斜顔はやはり縄文土偶伝統の特徴であり黥面と同様に継承されたものであろう。後頭部結髪土偶(東奈良タイプ)は大部分が頭部のみの出土であるため全形は不詳であるが、麻生田大橋38土偶(第Ⅳ③-6図6)は肩と腰が隆起する扁平中実の胴部をもち、また黥面土偶である長野県出土土偶(第Ⅳ③-6図8)にも肩パッドをもつ扁平な胴部が確認されるなど、胴部が伴うのであれば刺突文土偶に淵源をもつ形態が想定される。

田村C1SK1004土偶(第Ⅳ③-1図5)は極度に簡略化された後頭部結髪土偶で目の表現を欠きイレズミをもたない。消化器にあたる穿孔をもち土偶の系譜をひくが、弥生前期後半(西見当2式)の田村遺跡は弥生社会のネットワークにあり、同じく弥生前期後半の弥生集落から出土した鴨部川田土偶(第Ⅳ③-6図1)と併せてみるとむしろ弥生文化の構成要素といえよう。田村C1SK1004土偶は頭部のみで完結するが、仮に鴨部川田土偶を人頭立像とする見解(設楽1999)が妥当であるなら類品となる。また近年には香南市北地遺跡から黥面土偶の出土が伝えられた。小型の頭部片で、顎を突き出す斜顔には目・鼻・口が作出され、眼下には鴨部川田土偶に似た重弧文によるイレズミ表現がある。頭頂部は丸く結髪を欠く。弥生中期の事例となりそうであるが報告書が未刊であるため本格的な検討は今後に期したい。

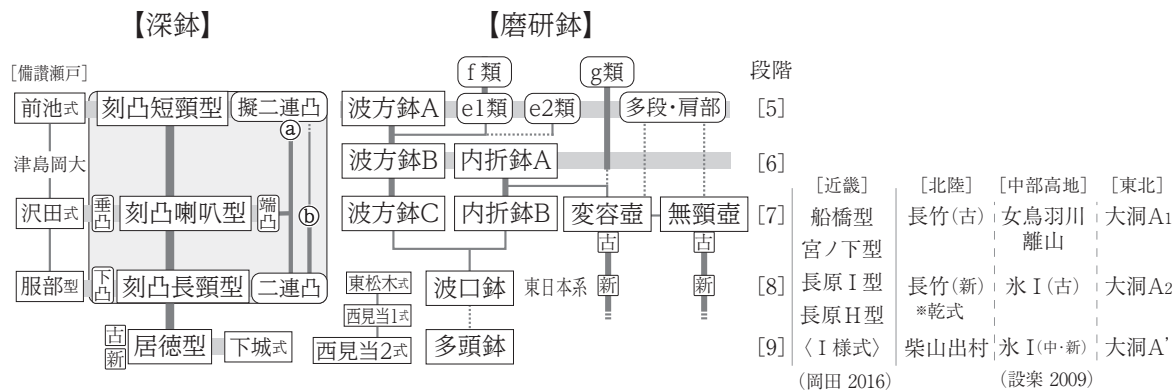
3 時期と背景

(1) 時期と地域間関係

関連資料を加えた南四国出土土偶の年代的位置は次のように整理できる。

- 大型装飾壺(連子窓文壺) [大洞 A1 式期]
- 居徳4D47土偶 [長竹式(新)-大洞 A2 式期]
- 居徳3A589土偶 [長原式・遠賀川系(主体)-大洞 A' 式期]
- 田村C1SK1004土偶 [弥生前期後半(西見当2式)]
- 田村C3SR301土偶 [弥生時代中期前葉(土佐Ⅱ様式)]
- 田村Loc.34B188分銅形土製品 [弥生時代中期]
- 田村D1SK1030人面付土製品 [弥生時代後期]

南四国の編年(第Ⅳ③-7図、宮里2022a・b)に照らすと、居徳4D47土偶は「刻凸長頸型深鉢・磨研鉢8段階」にあたり、居徳3A589土偶は「刻凸長頸型深鉢・磨研鉢8段階」から「居徳型深鉢・磨研鉢9段階」までを見込んだ時期となる。田村C1SK1004土偶は、弥生土器との併行関係が厳密でないがおよそ「居



第IV③-7図 地域間の併行関係

徳型深鉢・磨研鉢9段階」に対応する。南四国の縄文晩期系土器は、深鉢においては備讃瀬戸との関係が深く、磨研鉢においては九州との類似をみせつつ展開した。他方、居徳遺跡に突如貫入する東日本系文物は包含層において刻目突帯文土器と共伴する。東日本系土器は、居徳遺跡1C区において下部のIV D層(刻凸喇叭型深鉢・磨研鉢7段階)と区別して遺物を収拾したIV B層から集中的に出土した。IV B層の時期幅は「刻凸長頸型深鉢・磨研鉢8段階」から「居徳型深鉢・磨研鉢9段階」にわたりほぼ弥生前期に対応する。「刻凸喇叭型深鉢・磨研鉢7段階」の新しい時期を含む可能性があるが、居徳4D47土偶に始まる土偶の出現および東日本系土器の顕在化は、およそ大洞A2式-遠賀川式出現に対応する時期となる。

居徳遺跡には50点を超える東日本系土器がある(宮里 2017)。故地が確かなのは大洞A1式の大型装飾壺(連子窓文壺)であるが、関根達人(2002)は胎土分析の成果を踏まえ、東北中部の工人により中部高地(もしくは西南関東)で製作されたものが北陸経由で居徳遺跡に搬入されたと考えた。鈴木正博(2003・04・07)は大洞A1式(居徳遺跡)からA2式(乾遺跡)にわたる資料を一連の現象と括って居徳遺跡と北陸の乾式を関連づけたが、筆者はこれを参考に、筒形土器(1C1286・1C1379)や蓋や鉢にみられる、三角挾込みで作出された楕円形区画内に線文数条を充填する文様(1A75・1C1336・3A107)を北陸系土器として提示した(宮里 2018)。しかし湯尻修平(2022)が再考を促したように存外類品は乏しく、北陸が故地であったとしても土偶と同様に相当の変容を見込まねばならない。他方、中部高地との関わりを示す資料に浮線文土器がある(出原 2010: 図10-141)。図によれば口縁が上方に立ちあがる鉢形土器の破片で、突出する口唇外端には眼鏡状隆起に類した文様があり、幅の狭い無文の頸部をはさんだ胴部には眼鏡状隆起に類する浮線文が認められる。出原(2010)は氷I式に先行するタイプ、関根(2022)は女鳥羽川式としたが、筆者は離山式と氷I式古段階の中間的な特徴を示す資料と考える⁽¹¹⁾。西日本には50点を超える浮線文土器が知られるが(小林編 1999)、近畿を中心とする大部分の地域は氷I式中段階であり(石川 2000)やや先行する事例となる。

以上を総合すると、東北-中部高地-北陸からの東日本系文化の影響は中間の近畿圏に先だって南四国に及んでいる。根拠資料に乏しいが、大型装飾壺・居徳4D47土偶・木胎彩色漆器など大洞A式期の東日本系文物は、三田谷文様(岡田 2000)に北陸との関係が指摘される山陰地方や、南四国との関係が深い備讃瀬戸を経由してもたらされた可能性がある。居徳4D47土偶と類似点をもつ、花崗岩地帯で製作された居徳3A583土偶もあるいは備讃瀬戸からの搬入品といえようか。居徳3A589土偶の大洞A'式期になると近畿を中心とする台式土偶の影響圏に入り、東北からの影響は部分的なものとなる。居徳3A589土偶は後代に瀬戸内中心の分布圏を形成する分銅形土製品への接近を示しており、四国に生じた新たな時流の反映がある。後頭部結髪土偶の弥生前期後半には、出土地が居徳から田村に移るなど土偶のネットワークが縄文系から弥生系に切り替わった様相を示す。鴨部川田土偶と北地土偶の類似は南四国と備讃瀬戸南岸域との関わりを示し、その関係性は分銅形土製品への傾斜を示

す居徳 3A589 土偶にも通じる。奴風形系列に淵源をもつ田村 C3SR301 土偶は弥生中期であるが、稀少な類例である愛知県東光寺土偶(大洞 A₂式～A'式期)とは時期・地域・形態ともに懸隔が大きく、間をつなぐ類例を期待する状況である。いずれのケースにおいても型式組列間の対応関係は厳密でなく広域編年のさらなる整備が求められる。

(2) 土偶の製作環境

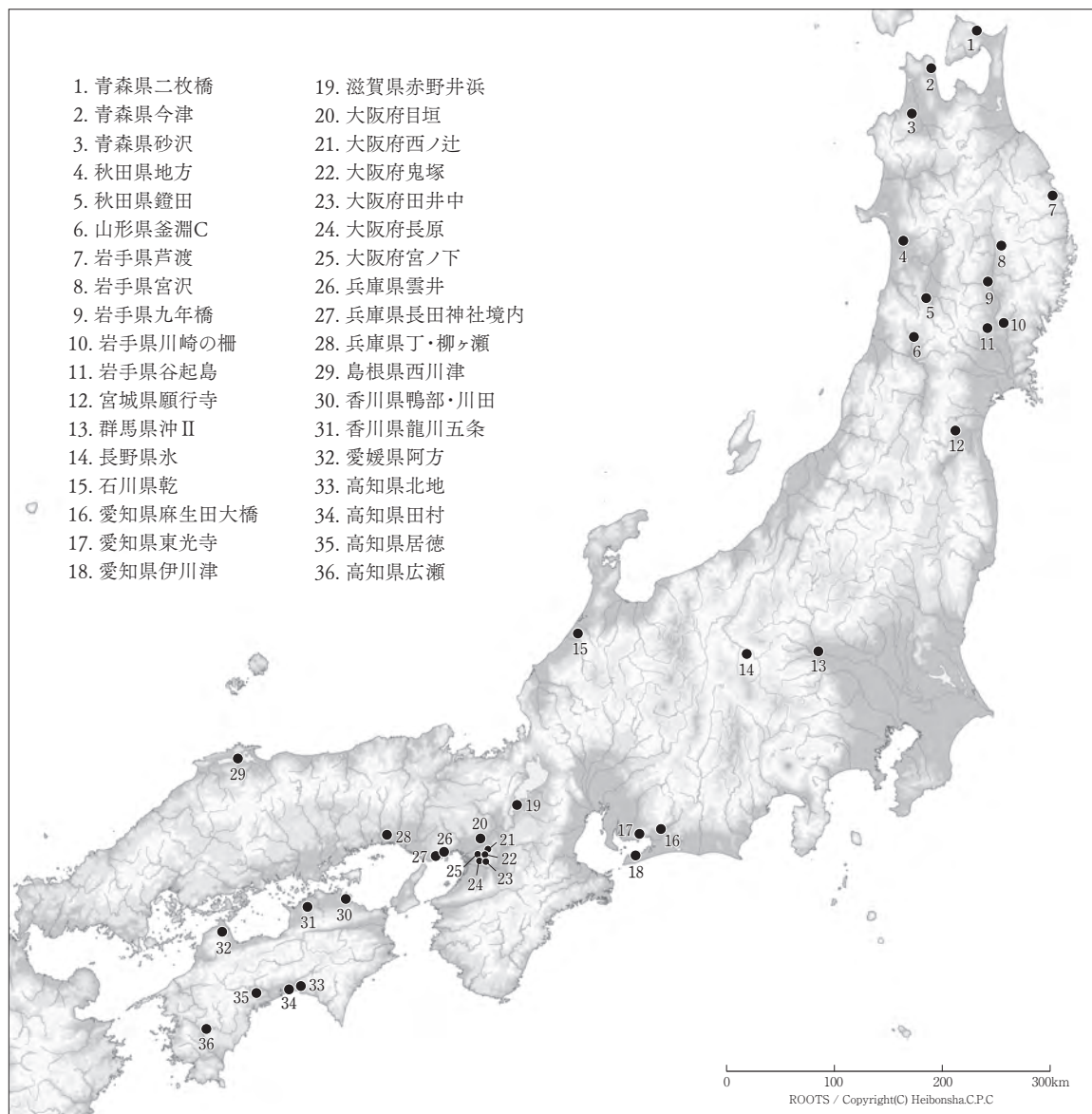
南四国と関連地域の土偶を検討してきたが、全体を通じて得られる印象は「多様」である。近畿の終末期土偶は台式土偶を中心に相対的に定型化傾向が認められるが、それでも土器 1 型式内の型式変化は目まぐるしい。多様さの要因は要素のランダムな組合せや誇張にある。居徳 4D47 土偶や居徳 3A589 土偶に顕著であるが、同様の現象は三河地域の資料群にも認められる。麻生田大橋遺跡(愛知県埋蔵文化財センター 1991、豊川市教育委員会 1993)からは 84 点の土偶が出土している。包含層出土資料が多く厳密な時期の特定は困難であるが、およそ五貫森式から檜王式(大洞 A 式～A'式)の間に収まる(前田 1993)。中実で立体感があり腰が張った大洞系の土偶(豊川市教育委員会 1993: 図版 142-3)、近畿系の台式土偶(第Ⅳ③-5 図 6)、刺突文土偶系の腰と肩が張った後頭部結髪土偶(第Ⅳ③-6 図 6・7)を顕著な例として、頭部・胴部に各種のバリエーションがみられる(前田 1993)。顕著な 3 者がおよそ時期差であれば、系統が目まぐるしく変わるなかで、部分の表現に様々な選択肢をもち、型の規範が緩い製作環境にあったといえる。五貫森式期の田原市伊川津土偶(第Ⅳ③-4 図 6)は台式土偶と同様のプロセスで河崎の柵疑定地土偶(第Ⅳ③-4 図 4)や今津土偶(第Ⅳ③-4 図 3)の環状腕を取り込んだ形態をもち、独自性が際立つ。同様の環状腕をもつ豊川市東光寺土偶(第Ⅳ③-4 図 7)は長い胴部と腰部隆帯、想定される短脚と腕が側方に張り出す形状から、奴風形系列に含めて考えることができる。大型でありサイズ感はむしろ結髪土偶に近い。胴部の断面は台形で、厚みに違いがあるが、第Ⅰ段階の台式土偶に類似する。環状腕は伊川津土偶の造形が地域で継承され奴風形系列の腕部に移植されたと考えられる。背面の頸根にみられる横方向の隆帯は麻生田大橋の台式土偶(第Ⅳ③-5 図 6)にも認められ製作環境の連帯を窺わせる。伊川津土偶の肩が後方にやや反ることや東光寺土偶の環状腕の背面が側方に向かって厚みを増すことは、台式土偶一般に通じる特徴である。東北に根を持つ近畿や東海の土偶が、いくつかの共通理解のもとで諸要素を様々なアレンジし組み換えながら製作された状況を示す事象であり、南四国でも同様に居徳遺跡や田村遺跡において、時期とともに系統を違えながら規範の緩い型にしたがって諸要素を組合せつつ、地域固有の土偶を製作したと考えることができる。

結び

居徳遺跡にまつわる主要課題のうち土偶について南四国出土資料の枠組みで系譜を追求した。論拠となる資料は十分でないが、南四国の各土偶は、系統が順次入れ替わるなか、諸要素の任意の組合せ・アレンジが許容される、定型化にいたらない製作環境において生み出されたものと結論づけた。通常ならば他人の空似と断じられる遠方資料との比較が成り立つのは、東日本系文物が西日本の各地で多数確認されている背景に基づく。居徳遺跡の大洞式大型装飾壺には東北の工人・中部高地の材料・北陸経由といった来歴が示されたが、本稿が対象とした土偶や、木胎彩色漆器の理解を深めるためには未だ故地が比定できない東日本系土器に対する広域・詳細な比較研究が必要となる。継続して取り組みたい。

本稿をなすにあたり下記の機関からご助力を賜りました。記して感謝申し上げます。

愛知県埋蔵文化財センター、愛媛県教育委員会、愛媛県埋蔵文化財センター、大阪市文化財協会、
香川県埋蔵文化財センター、高知県立埋蔵文化財センター、神戸市埋蔵文化財センター、
香南市文化財センター、豊川市桜ヶ丘ミュージアム、田原市博物館、東大阪市立郷土博物館、
東大阪市立埋蔵文化財センター



第IV③－8図 遺跡の位置

註

- (1) 居徳遺跡出土土偶については調査区および報告書遺物番号により呼称する。
- (2) 田村遺跡出土土偶については調査区および出土遺構により呼称する。その他遺跡の資料については必要に応じて報告書の掲載番号を加える。
- (3) 金子(2014)が従来の「結髪形土偶」に対し、より簡素な「結髪土偶」の名称を提案した。本稿はこれに準じる。
- (4) 会田が列举した特徴は次のとおりである。①頭髪部表現はアーチ状、②顔は45度上を向く、③乳房と肩は突起として連結される、④胸部に工字文や平行沈線文(連結)をもつ、⑤正中線があり下端には臍の表現(突起・刺突など)を伴う、⑥刺突文が充填されたパンツ状文様帯をもつ、⑦中空である、⑧赤彩もある、⑨背部に左右対称の文様(沈線・破線・円文)をもつ、⑩施文は沈線・キザミ・破線・円形竹管・刺突による、⑪顔表現は写実的でそれぞれに個性がある、⑫胴は全体に逆三角形で腕の表現は明確でない、⑬大洞A'式前後の土器を伴う。
- (5) 金子は結髪土偶の型式変化が明瞭な部分として、結髪の輪廓(弧状→逆反り)、腰部のパンツ状区画(水平→斜め)、プロポーシオン(腕の形骸化、細腰化)をあげた。また変化の傾向をしめす部分として、口周りの沈線文(顕在化)、正面肩の沈線文(顕在化)、胸の隆帯(大型品に限り略化)、正面脇腹の文様(<・C→2～3条の平行沈線)、背面文様(左右連続→左右分割)をあげた。いずれも大洞A2式から大洞A'式にかけて生じる変化とした。

- (6) 会田(1979)は、刺突文土偶の特徴を①頭髪部に冠状の突起をもつ(貫通孔あり)、②肩部にパッド状の隆起がある、③顔は上を向く、④体部に刺突または縄文が充填される、と整理した。金子(2004)によれば、肩パッドは大洞A'式古期に発達する。
- (7) 砂沢遺跡の報告では、C形態として、C1:脚が2本に分かれるもの、C2:脚の間に貫通孔があるもの、C3:両脚が密着するもの、に分類された。
- (8) 奴風形土偶のほかは、a類:結髪形・刺突文融合類型の系譜をひく中空土偶、b類:結髪形の系譜をひく中実板状土偶、d類:扁平板状のヒトデ形、e類:脚部台状、f類:土版形の土偶、とされた。b類のうちにも奴風形に類するものがある。
- (9) 資料を実見した結果、長原タイプ土偶初現期の様相を示すのは宮ノ下土偶(第Ⅳ③-5図1、東大阪市教委1996)であるとする。宮ノ下土偶は断面台形で肩に向かって撥形に開く体部に断面楕円形の腕が加えられた形態である。両側穿孔により碗部を作出することで胴部断面が扁六角形となる西ノ辻土偶(第Ⅳ③-5図2)とは顕著に対比される。大野が第Ⅰ段階とした長原Ⅲ148土偶(第Ⅳ③-5図3)は宮ノ下土偶と同様に胴部断面が腹側に狭まる台形であるが、胴および全形が直線的で、これに応じて腕の内面が平坦となる。京大構内I58(京大埋文1997)の腕断面も同様である。第Ⅰ段階のなかでも宮ノ下土偶がより古式であろう。
- (10) 秋山は次の時期区分を設けた。A期:滋賀里Ⅳ式～船橋式(A1:滋賀里Ⅳ式、A2:船橋式)、B期:長原式(弥生土器を伴わない)、C期:長原式・弥生土器共伴期(C1:長原式主体、C2:遠賀川系主体)、D期:弥生前期(長原式など伴わない)。
- (11) 外面には漆が厚く塗布されるという(出原2010)。出原恵三氏に写真・拓本を提供いただいた。記して感謝いたします。

文献

- 会田容弘、1979、「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」『山形考古』第3巻第2号、山形考古友の会、27～43頁
- 秋山浩三、2002、「弥生開始期における土偶の意味」『大阪文化財論集Ⅱ』、大阪府文化財センター(秋山2007に補訂収録)
- 秋山浩三、2007、『弥生大形農耕集落の研究』、青木書店
- 石川日出志、1987、「人面付土器」『季刊考古学』第19号、雄山閣、70～74頁
- 石川日出志、2000、「突帯文期・遠賀川期の東日本系土器」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、1221～1240頁
- 磯前順一、1987、「屈折像土偶」について『考古学雑誌』第72巻第3号、日本考古学会、1～29頁
- 磯前順一、1992、「関東以西の屈折像土偶—地域性への覚書—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集、国立歴史民俗博物館、35～48頁
- 伊藤正人、2005、「顔の輪廻—土偶と土面の西東—」『古代学研究』第168号、古代学研究会、19～39頁
- 大坂拓、2009、「大洞A2式土器の再検討」『考古学集刊』Vol.5、明治大学文学部考古学研究室、39～74頁
- 大野薫、1999、「長原タイプ終末期土偶試論」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、11～29頁
- 大野薫、2000、「近畿地方の終末期土偶」『土偶研究の地平:「土偶とその情報」研究論集4』、勉誠出版、215～245頁
- 岡田憲一、2000、「三田谷Ⅰ遺跡出土土器文様をめぐる問題」『三田谷Ⅰ遺跡 Vol.3』、島根県教育委員会他、81～84頁
- 岡田憲一、2016、「「凸帯文」と「遠賀川」の接続—奈良県観音寺本馬遺跡出土凸帯文土器の評価—」『魂の考古学—豆谷和之さん追悼論文集—』、豆谷和之さん追悼事業会、11～22頁
- 岡本健児、1963、「高知県広瀬縄文遺跡の調査」『高知県文化財調査報告書』第13集、高知県教育委員会、28～53頁
- 片岡肇、1983、「近畿地方の土偶について」『古代学叢論』、角田文衛先生古稀記念事業会、55～76頁
- 金子昭彦、2004、「結髪土偶と刺突文土偶の編年—東北地方北部における縄文時代晩期後葉の大形土偶—」『古代』第114号、早稲田大学考古学会、21～50頁
- 金子昭彦、2015、「縄文土偶の終わり」『考古学研究』第62巻第2号、考古学研究会、56～77頁
- 金子昭彦、2019、「長原タイプ土偶の系譜」『考古学研究』第66巻第3号、考古学研究会、108～117頁
- 小林青樹、2000、「東日本系土器からみた縄文・弥生移行期の広域交流序論」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、1221～1238頁

- 小林青樹、2002、「分銅形土製品の起源—岡山県総社市真壁遺跡出土の分銅形土製品からの出発—」『環瀬戸内海の考古学 下巻』、古代吉備研究会、19～31頁
- 小林青樹、2007、「縄文—弥生移行期における祭祀と変化」『縄文時代の考古学 11 心と信仰—宗教的観念と社会秩序—』、同成社、257～273頁
- 小林青樹編、1999、『考古学資料集9 縄文・弥生移行期の東日本系土器』、国立歴史民俗博物館春成研究室
- 佐藤嘉広、1996、「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』第81巻第2号、日本考古学会、31～60頁
- 佐藤嘉広、2004、「東北祭祀遺物の特殊性」『季刊考古学』第86号、雄山閣、44～48頁
- 設楽博己、1998、「黥面の系譜」『長野県小諸市 氷遺跡発掘調査資料図譜 第3冊—縄文時代晩期終末期の土器群の研究—』、同刊行会、153～164頁
- 設楽博己、1999、「土偶の末裔」『新 弥生紀行—北の森から南の海へ—』、朝日新聞社、160～161頁
- 設楽博己、2004、「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根考古学会誌』第20・21集合併号、島根考古学会、189～209頁
- 設楽博己、2008、「イレズミの起源」『縄文時代の考古学 10 人と社会—人骨情報と社会組織—』、同成社、207～218頁
- 設楽博己、2009、「東日本系土器の西方への影響」『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』、同成社、188～203頁
- 設楽博己、2017、「土偶形容器考」『弥生時代人物造形品の研究』、同成社、43～50頁
- 設楽博己、2021、『歴史文化ライブラリー 514 顔の考古学：異形の世界史』、吉川弘文館
- 設楽博己・石川岳彦、2017、『弥生時代人物造形品の研究』、同成社
- 鈴木正博、1985、「「荒海式」生成論序説」『古代探叢』Ⅱ、早稲田大学出版部、83～135頁
- 鈴木正博、1987、「続大洞A2式考」『古代』第84号、早稲田大学考古学会、110～133頁
- 鈴木正博、1993、「荒海貝塚研究と大阪湾、「スティング」風に」『利根川』14、利根川同人、42～57頁
- 鈴木正博、2004、「大きな顔の居徳—弥生式初期におけるリスクマネジメントとしての「縄紋式イデオロギー」—」『利根川』26、利根川同人、16～26頁
- 鈴木正博、2007、「「亀ヶ岡式」分布の南下と西日本の漆工芸—「彩色漆文様帯」による弥生式文化形成の視点の確立—」『環境史と人間』第1冊、明治大学学術フロンティア、63～91頁
- 須藤隆、1998、『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究—縄文から弥生へ—』、纂修堂
- 関根達人・柴正敏、2022、「居徳遺跡出土の大洞A1式装飾壺の製作地と製作者」『高知県立歴史民俗資料館紀要』第26号、高知県立歴史民俗資料館、1～12頁
- 曾我貴行・佐竹寛、2002、「四国の低湿地遺跡—居徳遺跡群の諸様相—」『季刊考古学』第73号、雄山閣、49～52頁
- 田中清美、1992、「長原遺跡の土偶」『葦火』38号、大阪市文化財協会、6～7頁
- 出原恵三、2000、「土佐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』、木耳社、370～435頁
- 出原恵三、2010、「弥生文化成立期の二相：田村タイプと居徳タイプ」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』、高知大学人文社会科学系、7～37頁
- 寺前直人、2015、「屈折像土偶から長原タイプ土偶へ」『駒沢考古』第40号、駒澤大学考古学研究室、29～43頁
- 寺前直人、2017、『歴史文化ライブラリー 449 文明に抗した弥生の人びと』、吉川弘文館
- 中村大介、2003、「祭祀遺物にみる縄文時代から弥生時代への変化とその意義（上・下）」『古代学研究』162・163、古代学研究会、22～37頁・21～33頁
- 中村良幸、1979、「岩手県宮沢遺跡発見の縄文時代終末期の土偶」『考古学ジャーナル』No.168、ニューサイエンス社、17～19頁
- 濱野俊一、1994、「東奈良（HN-D-6-N・0）出土の弥生前期の土偶と調査概要」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第29回）資料』、大阪文化財センター、33～40頁
- 藤井太郎・丸杉俊一郎、2000、「長田神社境内遺跡 第10次調査」『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』、神戸市教育委員会文化財課、171～178頁
- 前田清彦、1988、「縄文晩期終末期における土偶の変容—容器形土偶成立前夜の土偶の様相—」『三河考古』創刊号、三河考古刊行会、9～23頁
- 前田清彦、2000、「後頭部結髪状土偶とその周辺」『土偶研究の地平：「土偶とその情報」研究論集4』、勉誠出版、145～168頁
- 宮里修、2017、「居徳遺跡から縄文・弥生移行期研究を展望する—高知県における縄文時代研究の現状と課題—」『中四国縄文時代研究の現状と課題 発表要旨集』、中四国縄文研究会香川大会実行委員会、57～74頁

- 宮里修、2018、「晩期東日本系土器の四国・瀬戸内への波及」『中四国地方の外来系土器 発表資料集・集成資料集』、中四国縄文研究会島根大会実行委員会、33～52頁
- 宮里修、2022a、「南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列」『高知考古学研究』第6号、高知考古学研究会、1～26頁
- 宮里修、2022b、「南四国縄文晩期磨研鉢の分類と編年」『海南史学』第60号、高知海南史学会、1～22頁
- 森田孝一、2003、「分銅形土製品私考」『山口大学考古学論集』、近藤喬一先生退官記念事業会、93～108頁
- 山内清男編、1964、『日本原始美術1』、講談社
- 湯尻修平、2022、「乾式土器について」『石川考古学研究会会誌』第65号、石川考古学研究会、1～16頁

報告書

- 愛知県埋蔵文化財センター（安井俊則）編、1991、『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第21集
- 愛知県埋蔵文化財センター（加藤安信他）編、1993、『東光寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第42集
- 青森県教育委員会（岡田康弘他）編、1986、『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第95集
- 秋田県教育庁社会教育課（山下孫継他）編、1974、『鎧田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第28集、秋田県教育委員会
- 秋田市教育委員会（石郷岡誠一）編、1987、『地方遺跡』『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財調査報告書』、秋田市教育委員会
- 石川県埋蔵文化財センター（岡本恭一）編、2001、『松任市乾遺跡発掘調査報告書A・C区下層編』、石川県埋蔵文化財センター
- 一関市教育委員会（工藤武）編、1982、『第4次谷起島遺跡発掘調査概報』、一関市教育委員会
- 茨木市教育委員会編、1999、『平成9・10年度発掘調査事業報告 付. 目垣遺跡（第91-1次・第98-1次）発掘調査略報』、茨木市教育委員会
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（羽柴直人他）編、2006、『河崎の柵疑定地発掘調査報告書（第3分冊 縄文時代編）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第474集
- 愛媛県埋蔵文化財センター（真鍋昭文他）編、2000、『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書84、愛媛県埋蔵文化財センター
- 大阪市文化財協会（永島暉臣慎）編、1982、『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』、大阪市文化財協会
- 大阪市文化財協会（永島暉臣慎）編、1988、『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告Ⅲ—（仮称）大阪市立第8養護学校建設に伴う発掘調査報告書—』、大阪市文化財協会
- 大阪市文化財協会（田中清美他）編、1992、『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅴ—市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書—後編』、大阪市文化財協会
- 大阪府教育委員会（亀島重則）編、1994、『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅳ』、大阪府教育委員会
- 大畑町教育委員会（橋善光）編、2001、『二枚橋（2）遺跡発掘調査報告書』大畑町文化財報告書第12集
- 北上市教育委員会（藤村東男）編、1987、『九年橋遺跡第10次調査報告書』北上市文化財調査報告第44集、北上市教育委員会
- 香川県埋蔵文化財調査センター（宮崎哲治）編、1996、『龍川五条遺跡Ⅰ』、香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 香川県埋蔵文化財調査センター（森下友子）編、2002、『鴨部・川田遺跡Ⅲ』、香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- 京都大学埋蔵文化財研究センター編、1997、『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
- 高知県教育委員会編、1986、『田村遺跡群 第4分冊』、高知県教育委員会
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター（曾我貴行他）編、2001a、『居徳遺跡群Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第62集（1B・1C・1D区）
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター（佐竹寛他）編、2001b、『居徳遺跡群Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第66集（写真編）
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター（藤方正治他）編、2002、『居徳遺跡群Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第69集（1A・1C・1DN・1F区）
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター（佐竹寛他）編、2003a、『居徳遺跡群Ⅳ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第78集（1E・2A・3B・4C区）

高知県文化財団埋蔵文化財センター（松葉礼子他）編、2003b、『居徳遺跡群Ⅴ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集(4A・4B区)

高知県埋蔵文化財センター（吉成承三）編、2004a、『田村遺跡群Ⅱ 第2分冊』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

高知県文化財団埋蔵文化財センター（曾我貴行）編、2004b、『居徳遺跡群Ⅵ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集(5A・3A・1C・4D区)

神戸市教育委員会(丹治康明)編、1991、『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』、神戸市教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会(木戸雅寿他)編、2009、『赤野井浜遺跡 第2分冊』

「土偶とその情報」研究会編、1996、『土偶シンポジウム5 宮城大会 東北・北海道の土偶Ⅱ』

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（岩橋孝典他）編、2001、『西川津遺跡Ⅷ』、島根県教育委員会

田原市教育委員会(増山禎之・鷺坂有吾)編、2015、『伊川津貝塚・平野貝塚調査概要報告書』田原市埋蔵文化財調査報告書第8集

とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター（手塚達弥）編、2001、『藤岡神社遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第197集、栃木県教育委員会・とちぎ生涯学習文化財団

豊川市教育委員会(林弘之・前田清彦)編、1993、『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』、豊川市教育委員会

東大阪市遺跡保護調査会(芋本隆裕)編、1975、『鬼塚遺跡』『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』、東大阪市遺跡保護調査会、1～19頁

東大阪市教育委員会(下村晴文)編、1996、『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書—第1分冊—』、東大阪市教育委員会他

兵庫県教育委員会(岡崎正雄他)編、1985、『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書30、兵庫県教育委員会

弘前市教育委員会編、1991、『砂沢遺跡発掘調査報告書—本文編・図版編—』、弘前市教育委員会

藤岡市教育委員会(荒巻実他)編、1986、『C11 沖Ⅱ遺跡』、藤岡市教育委員会

真室川町教育委員会編、1986、『釜淵C遺跡 発掘調査報告書』山形県最上郡真室川町文化財調査報告書第1集、真室川町教育委員会

挿図出典

第Ⅳ③-1図 1・3・4・6：筆者実測(高知県立埋蔵文化財センター所蔵)、2：高知埋文(2004b)をトレース、5：高知埋文(2004a)をトレース、7：高知県教委(1986)、8：岡本健児(1963)をトレース

第Ⅳ③-2図 1：真室川町教委(1986)、2：秋田県教育庁社会教育課(1974)、3：中村(1979)、4：北上市教委(1987)

第Ⅳ③-3図 1：秋田県教委(1987)、2・3：石川県埋文(2001)、4：「土偶とその情報」研究会編(1996：岩手74-3)、5・11：北上市教委(1987)、6～8：弘前市教委(1991)、9・10：一関市教委(1982)、12：藤岡市教委(1986)

第Ⅳ③-4図 1：「土偶とその情報」研究会編(1996：宮城11-14)、2：大畑町教委(2001)、3：青森県教委(1986)、4：岩手県埋文(2006)、5：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課他(2009)、6：筆者実測(田原市博物館所蔵)、7：筆者実測(愛知県埋蔵文化財センター所蔵)、

第Ⅳ③-5図 1・12：筆者実測(東大阪市立郷土博物館所蔵)、2：筆者実測(東大阪市立埋蔵文化財センター所蔵)、3～5・8・10：筆者実測(大阪市文化財協会所蔵)、6・11：筆者実測(豊川市桜ヶ丘ミュージアム所蔵)、7：大阪府教委(1994)、9：筆者実測(神戸市埋蔵文化財センター所蔵)、13：石川(1987)、14：筆者実測(愛媛県教育委員会所蔵)、15：香川県埋文(1996)

第Ⅳ③-6図 1：香川県埋文(2002)、2：筆者実測(神戸市埋蔵文化財センター所蔵)、3：濱野(1994)、4：島根県教育庁埋文(2001)、5：茨木市教委(1999)、6・7：豊川市教委(1993)、8：設楽・石川(2017)、9・11・13：高知埋文(2002)、10・12：高知埋文(2001a)

第Ⅳ③-7図 筆者作成 第Ⅳ③-8図 筆者作成

※教育委員会は「教委」、埋蔵文化財センターは「埋文」とする。